研修生だより　№5　　4／26～5／1

社会福祉法人建昌福祉会　帖佐すずらん保育園　福富

日付	時間	活動内容 ＆ 場所
4月26日 （日）	12:00～15：00　車移動 15:30	サンフランシスコ国際空港へ移動 サリナスへ移動 サリナス到着
4月27日 （月）	12：00　ホテルロビー	現地在住の日本人　高田里佳子さんにインタビュー 現地の子育て事情、デイケア等の選び方や申請方法等について
4月28日 （火）	7：45　集合 車で移動	8：00　ROOSEVELT SCHOOL Preschool・TK・Kindergarten 説明見学・意見交換
4月29日 （水）	16：30　集合 車で移動	17：00　Family preschool Little Bee’s 見学・質疑応答
4月30日 （木）	7：15　集合 車で移動 12：30　車で移動	8：00　Rose Ferrero Elementary School TK・ Kindergarten　説明見学・質疑応答 12：45　Soledad Preschool　施設見学・質疑応答
5月1日 （金）	10:15　集合　車で移動 13:00　車で移動	10：30　Orom children’s center 施設見学・意見交換 14:00　chaparral ranch marina caldery 施設見学・説明

サリナスへの日本人移住は、1955～56 年に鹿児島県の旧串木野市から約 70 人が集団移住したことを起点に、地域農業の発展と姉妹都市交流へと広がりました。サリナスは農業の町として発展し、戦後の鹿児島・串木野の若者たちはアジア難民救済法を活用して移住しました。彼らは荒れ地を開墾し、花卉栽培や果樹、ガーデニング業で成功を収め、地域社会に深く根づきました。この移住を主導したのが、カリフォルニア農業に詳しかった内田善一郎氏で、彼の尽力により串木野からの集団移住が実現したと記録されています。こうした成功と結びつきは、1979 年の姉妹都市盟約締結へと発展し、現在まで高校生交流などの草の根交流が続いています。

いちき串木野市との姉妹盟約の碑

そんな歴史ある場所へ！いちき串木野市のサリナス姉妹都市友好協会の方々のお力をいただき研修を実施することができました。ここではデイケア（保育園）、小学校の Preschool・TK・Kindergarten、子育て中の在住日本人の方のインタビューを実施しています。

サリナス在住日本人の高田里佳子さんから、現地の保育園申請の実情や、利用されている Home Daycare（個人宅で運営される保育）の状況についてお話を伺いました。特に印象に残ったのは、利用料金の高さと、個人の施設を利用する場合は支援がほとんどないという現実です。家庭の負担が大きく、保育を必要とする家庭が気軽に利用できる環境とは言えないと感じました。また、施設探しの難しさも大きな課題として話されていて、日本のように自治体の情報が整備されているわけではなく、SNS で情報を探したり、園外保育中の保育者に直接声をかけて話を聞くなど、個人の努力に頼らざるを得ない状況だったということです。こうした苦労を経てようやく保育先を見つけられるという話は、非常にインパクトが強く心に残りました。

一方で、日本のような「保活」を経ずとも、比較的早く受け入れ先が見つけられるという利点もあるとおっしゃっていました。しかし、最終的には経済的な余裕がなければ利用が難しいという現実も待っているのは確か。その中で、TK や低所得家庭を対象とした Head Start といった制度が、地域の子どもと家庭を支える重要な制度として機能していることを、今回の対話を通してより深く理解することができたインタビューでした。

小学校の Preschool・TK・Kindergarten では、Roosevelt School と Rose Ferrero Elementary School に行かせていただきました。合同研修の中で出てきていた施設に直接行くことができ、さらに学びが深くなりました。特に地域の文化と教育が深く結びついた独自の学びの姿に強い印象を受けました。教室では英語とスペイン語が自然に行き交い、子どもたちは二つの言語があることを当たり前のように受け入れている印象でした。これは Two-Way Dual Language

Roosevelt School

Rose Ferrero Elementary School

Immersion というプログラムによるもので、母語を尊重しながら英語を身につけられる環境が整えられていることに感心しました。

スペイン語の壁面も多い

また、サリナスという土地柄、メキシコ系移民が多く、家庭の経済状況や言語環境が学びに影響しやすい現実も感じ取れました。親が英語を話せない、長時間労働で学校との連携が難しいなど、子どもを取り巻く背景には複雑さが大きくあると考えます。しかし、学校はその課題を抱え込むのではなく、温かい雰囲気と丁寧な支援で子どもたちを包み込んでいると話を伺っていると感じることができました。バイリンガルの教員やスタッフが寄り添い、文化を尊重しながら学びを支える姿勢は、まさに地域に根ざした教育そのものなのではないでしょうか。今回の視察を通して、多文化・多言語の環境で育つ子どもたちの力強さと、それを支える学校の柔軟で包括的な取り組みに深く学ぶものがあった。

サリナス在住日本人の高田さんのご協力を得て、個人宅を活用したデイケアの Family Preschool Little Bee's の運営形態を見学する機会を得ることができました。セキュリティ体制が非常に厳格であり、利用児が在園している時間帯の見学は認められていないとのことで、園児が帰宅した後の時間に丁寧に対応していただきました。この点からも、家庭的な環境でありながら、安全確保に対する強い意識が徹底されていることがうかがえました。園は夫婦で運営される小規模な形態で、子どもたちは年齢ごとにグループ分けされ、それぞれの発達段階に応じた環境が整えられていました。室内はサークルによって空間が区切られ、活動内容に応じて場を使い分ける工夫が施されており、限られたスペースを最大限に活用しようとする姿勢が印象的でした。また、保育の根底には「子どもは生まれてからの 4～5 年が最も重要な時期である」という明確な理念があり、子どもの興味や関心を起点に一定期間のテーマを設定し、活動を展開しているということで、子どもを中心に据えた教育観が、日々の実践にしっかりと反映されていることが伝わってきました。さらに、子どもにとって必要な要素として「安全であること」「愛情を感じられること」「おいしい食事」の三点を挙げていましたが、いずれも保育の本質を捉えたものであり、深く共感する内容でした。家庭的な温かさと専門性が両立した保育のあり方を垣間見ることができ、個人宅でのデイケアが地域の子どもと家庭を支える重要な選択肢となっていることを改めて実感しました。

Family preschool Little Bee's 施設内

Soledad Preschool で感じたのは、地域の家庭に寄り添いながら、限られた資源の中で子どもたちの学びを丁寧に支えているという姿勢でした。午前と午後に分かれた短時間のクラスは、一見すると日本の保育園とは対照的ですが、その背景には「より多くの家庭に機会を届けたい」という州制度の意図があるように感じます。特に、利用料が収入によって変動し、一定以下の収入でなければ利用できない仕組みは、アメリカの社会保障の現実を象徴しているようです。家庭の経済状況が教育の入り口に直結する厳しさを感じる一方で、限られた時間の中でも子どもたちが安

心して過ごせる環境づくりに力を注ぐ姿勢には、強い使命感が感じられます。制度の制約と現場の工夫、その両方を肌で感じた学びの深い訪問でした。

空間うまく使った環境構成

Orom Children's Center を訪れて感じたのは、子どもたちが安心して過ごせる環境づくりを大切にしながら、その保育の根底にイタリアのレッジョ・エミリアの理念がしっかりと息づいているという点でした。特に、子どもを「有能な存在」と捉え、興味や関心から学びが広がっていくという考え方が、日々の活動や環境構成に自然に反映されていることが印象的でした。子どもが自ら選び、探求し、試行錯誤できるように整えられた空間は、まさにレッジョの「環境は第三の教師」という思想を体現しているように感じられました。

また、センターとしての丁寧なケアと、レッジョの探究的な学びが矛盾することなく共存している点にも深い学びがありました。乳児期の基本的欲求に応えながらも、子どもの表現や意思を尊重し、日々の小さな選択や関わりを大切にする姿勢は、子ども中心の保育そのものです。さらに、子ども同士の関わりを重視し、対話や共同的な活動を通して社会性を育む取り組みも、レッジョの協働性を大切にする文化と重なって見えました。

Shannan 氏の熱い保育の考えに共感しました

家庭との協働を大切にする姿勢も印象的で、保護者が日常的に園での子どもの様子を見ることができるシステムを入れており、その丁寧な伝えによって、園の理念や考え方がより伝わるのだと感じました。子どもを中心に、家庭と保育者が共に学び合うというレッジョの精神が、地域に根ざした形で実践されているように感じられます。

また、話を聞いた Shannan 氏によると、現在のハンガリー保育制度に大きな影響を与えたエミー・ピクラーの考え方を大いに参考にしているとのことでした。0 歳児から子どもは人としての権利を有しているという考え方がここにはあります。子どもの尊厳を守る思想は、そのまま子どもの主体性を中心にとらえた保育に直結すると考えます。Orom Children's Center は、子どもの可能性を信じ、その声に耳を澄ませながら育ちを支える温かい場であることを強く実感した訪問でした。

信頼関係を築くことがとても大事

急遽の訪問ではありましたが、Chaparral Ranch Marina Caldery でホースセラピーの現場についてお話を伺うことができ、心に残る学びとなりました。ここでは約 40 名の子どもたちが、それぞれ異なる背景や課題を抱えながら、馬との関わりを通して心の安定や自己肯定感の回復を目指しているそうです。スタッフの方が語った「馬も人も同じで、すべては信頼関係から始まる」という言葉が特に印象的でした。

馬は相手の緊張や不安を敏感に感じ取るため、子どもたちは馬と向き合う中で、自分の感情を整えたり、相手を思いやる姿勢を自然と学んでいくといいます。ブラッシングや世話、呼吸を合わせて歩くといった一つひとつの体験が、子どもたちに「できた」という実感をもたらし、安心できる関係性を築く手がかりになっていることが伝わってきました。

個人宅の庭が園庭になっています。
（Family preschool Little Bee's）

子どもたちの興味や関心から保育の内容をスタートし、深めるための環境
（Orom Children's Center）

子どもたちが自分でランチタイムのセッチングをしている
（Orom Children's Center）

保育環境の写真を

いくつか pickup！！

誰もがわかる視覚支援。万国共通のツール。Roosevelt School

サリナス文化の勉強！！

今回も、その土地の文化や歴史を知ることが、様々な学びにしっかりとつながりました！！